

令和6年度

対談会

期 日：令和6年11月15日（金）
15：00～17：00

場 所：アルカディア市ヶ谷 私学会館
7階 白根

公益財団法人 日本教材文化研究財団

テーマ：「スイスの教育者ペスタロッチーから学ぶもの」

1. 開会のご挨拶／登壇者のご紹介
2. 私がペスタロッチーに惹かれた理由
3. ペスタロッチーの生涯
4. ペスタロッチーの重要性
5. ペスタロッチーが家庭教育で重視したこと
6. ペスタロッチーから学ぶこと
7. 質疑・応答
8. まとめ

[ご出席者]

対談者 銭谷 眞美（日本教材文化研究財団 理事長）

鈴木 由美子（広島大学理事・副学長、財団評議員）

司会・進行 角屋 重樹（広島大学名誉教授、財団常務理事）



対談会

日 時 令和6年11月15日（金）

1. 開会のご挨拶／登壇者のご紹介

○新免

本日はお忙しい中、遠くは広島や京都からご出席を賜り、心から御礼と感謝を申し上げます。西日本への台風到来や銭谷理事長の海外出張などがあり、この対談会も二度の延期となりました。待ち望んでいた対談会だけあって、本日東京で開催できる喜びもひとしおでございます。

僭越ではございますが、対談会に先立ち、対談会開催に至るまでの経緯についてご紹介させていただきます。私は当公益財団の専務理事で、株式会社新学社の東京支社長を兼務しております新免利也と申します。

元文部科学省事務次官であられた銭谷理事長と、昨年5月の理事会の懇親会の席でお話していたときに、ペスタロッチーの話題で盛り上がりました。銭谷理事長は、お手元に配布させていただいた資料にありますように、研究紀要の52号と53号の中で、ペスタロッチーの考え方に触れられておられます。東北大学教育学部に進学された時に、ペスタロッチー研究で知られた前原寿先生の指導を受けられたと書かれておられます。後で聞きましたが、鈴木副学長も同じく前原先生から指導を受けられたと伺いました。

昨年の5月の理事会の前に、致知出版社の「月刊致知」5月号に掲載された鈴木副学長のインタビュー記事を拝読させていただいておまして、その投稿の題目が、「ペスタロッチーの生き方が教えるもの」でありました。これがその記事です。これを何気なく私、こうスッと出して見ていましたら、理事会の懇親会の席で銭谷先生からその記事を下さいと言われました。大変興味深く思われて帰られました。その場で、角屋常務理事も横におられましたので、「ペスタロッチーの生き方が教えるもの」というテーマで、銭谷理事長と鈴木副学長の対談会の企画が生まれたわけでございます。

対談会で得られた成果は、先ほどもご紹介しましたように、家庭教育確立運動を行っております全日本家庭教育研究会でも大いに活用させていただこうと願っております。

そして、次に広島大学にお伺いした際に、鈴木副学長の方から次のようなお言葉をいた

だきました。「情報化が進展する中で、人間の原初的な感情である母と子の間から生じる愛、感謝、信頼の感情を大切にすることが、より求められるようになってきていると思っております。ペスタロッチーを多くの方に知っていただくことで、人間にとって大切なものを多くの皆様に感じ取っていただければありがたく存じます。」でありました。

母と子の間から生じる愛、感謝、信頼の感情について、銭谷理事長との対談にてさらに深めることができればありがたく思います。

それでは、登壇者のご紹介をさせていただきます。

最初に、銭谷眞美先生です。

平成10年には、初等・中等教育局担当の大臣官房審議官になられ、教科書改善の建議を出されました。建議の中で「児童生徒にとって分かりやすく、丁寧なものであること」という考え方は、平成20年の改訂に伴って教科書が再び厚くなり、内容も充実したことにつながっていきました。なお、在職中、教育課程の基準である学習指導要領の改訂に、4度にわたって関わられました。

また、平成12年には内閣審議官になられ、小渕内閣総理大臣直属の教育改革国民会議担当室長を務められ、教育の憲法とも言うべき教育基本法の改正に取り組み、平成18年に60年ぶりの改正ができ、翌年にはいわゆる教育三法の成立を見られたことは忘れられない思い出と語っておられます。

その後、文化庁次長、文部科学事務次官、東京国立博物館館長を経られ、現在は新国立劇場の理事長であられ、内閣府所管公益財団法人日本教材文化研究財団の第7代の理事長を務めていただいております。著書では、先般4月10日にさきがけ新書から刊行された、「日本の教育と歩む」があり、元文科事務次官の半生を語っておられます。

次に、鈴木由美子先生であります。

広島大学大学院学校教育研究科修士課程、東北大学大学院教育学研究科博士課程後期単位取得退学で教育学博士であられます。広島大学大学院教育研究科教授、広島大学附属中学校・高等学校校長を経て、昨年4月より広島大学の理事・副学長に就任され、教育と平和をご担当されておられます。当公益財団の評議員を務めていただいております。

ご専門は道徳教育論であられ、著書、共著に「ペスタロッチー教育学の研究—幼児教育思想の成立」（玉川大学出版部刊行）、「やさしい道徳授業のつくり方」（溪水社刊行）「子どもが変わる道徳授業」（溪水社刊行）、「新道徳教育全集」（学文社刊行）などがあります。

最後に、本日の対談会の司会進行をお願いしております角屋重樹先生でございます。

文部省初等中等教育局教科調査官、広島大学教育学部教授、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長、日本体育大学児童スポーツ教育学部教授、国立教育政策研究所名誉所員、当公益財団の常務理事を長年務めていただいております。

ご専門は理科教育で、著書には「理科の学ばせ方・教え方事典」（教育出版刊行）、「新しい理科教育の理論と実践の方法」（現代教育社刊行）、「基礎学力を重視した教育のために」（金子書房刊行）などがございます。

それでは、司会進行の角屋常務理事にマイクをお渡ししたいと思います。先生方、今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

○角屋

はい、それでは始めたいと思います。まず私は、このお二人の先生の対談の司会進行をさせていただきます角屋です。よろしくお願いいたします。

それでは一番最初に、鈴木先生のほうから「スイスの教育者ペスタロッチーから学ぶもの」という形をお願いして、そして「私がペスタロッチーに惹かれた理由」ということも含めながら、皆さんにわかりやすくお話をいただければと思います。その後、銭谷先生からコメントあるいは色々な知見からの意味を解説いただければと思います。よろしくお願い致します。

2. 私がペスタロッチーに惹かれた理由

○鈴木

皆さんこんにちは。広島大学の鈴木と申します。本日は銭谷先生と対談する機会をいただきましたことに、日本教材文化研究財団の皆様にも厚く御礼を申し上げます。またお忙しいところ、司会をしていただきます角屋先生、大変ありがとうございます。

私がペスタロッチーに惹かれた理由ということですが、考えてみますと、卒論でペスタロッチーを取り上げてから、かれこれ40年以上ペスタロッチーを研究してきました。ペスタロッチーの記録映画を制作するという機会もあり、スイスに行ったときに知り合ったスイス人の方に、私がペスタロッチー研究を何十年もやっていると話したら、「なぜ？」と聞かれて、ペスタロッチーの考え方は日本の教育に大きな影響を与えているんではないかと覚えています。

なぜ私がペスタロッチーにこんなに惹かれたのだろうかということを振り返ってみま

すと、個人的な話になりますけれども、中学1年のときに3ヶ月くらい学校が閉鎖されるくらいの大水害がありました。

そうしたときにですね、畑や田が流されて、それで農業で食べていけなくなった友人たちがいまして、お父さんお母さんたちが出稼ぎに出かけ、一家離散のようなことが実際に起きました。同級生の中には、弟や妹がいるから、あなたは高校進学を諦めて働いてくれと言われた友人が何人もいました。

一方で、当たり前のように高校、大学に行く友人もいるんですね。そのとき私は、なんて世の中って不平等なのだろうと思ったんです。この不平等をなくして平等な世界にするにはどうしたらいいだろうと思いました。法律が平等を謳えばいいのかなと思ったのですが、法律が平等を謳ってはいるけどそうではない現実がある中で、私はやっぱり教育じゃないかなと思って、教育で人を平等にしていくことができるんじゃないかって思って、大学に行って教育学を勉強しようと思ったんですね。「教育は広島大学」と思っていたので、広島大学に進学しまして、入った研究室が当時、「ペスタロッチーを知らずして教育を語るなかれ」という伝統が残っていて、当たり前のようにペスタロッチーを知ったんですね。ずっとそこからペスタロッチーを勉強してきたんですけども、ペスタロッチーの中にある絶対的平等感というのがあって、簡単に言いますと、王様であっても、わらの伏屋に住んでいるような貧しい人間であっても、みんな本質的に平等なんだって考え方ですね。この平等感に惹かれたんじゃないかと今は思っています。それと、ペスタロッチーは子どもたち、しかも弱い子どもたちに寄り添った教育というのをずっと考えている人ですね。

私が生まれ育ったところはそういうところでしたので、弱きものに寄り添うこの教育って素晴らしいなって思って、ペスタロッチーに惹かれたような気がしているところです。ペスタロッチーといっても、皆さん多分初めて聞かれたことと思いますので、ペスタロッチーの紹介に移らせていただきます。

3. ペスタロッチーの生涯

○鈴木

ペスタロッチーのご縁で銭谷先生とお知り合いになれましたこと、光栄に思っています。ペスタロッチーの記録映画を制作しにスイスに行ったとお話ししましたが、当時東北大学教授であられた前原寿先生が海外学術研究という科研をおとりになられて、まだ助手だっ

た私をメンバーとして連れて行ってくださったんです。前原先生は、ペスタロッチー研究で世界的に有名な広島大学教授の長田新先生の教え子にあたる方です。私は東北大学教育学部の教育内容講座の助手として採用されたばかりの時でした。

女性初の助手であったこと、講座の助手を連れて行くと仕事が回らないということもあって、難しいこともあったのですが、そうした中で、前原先生が私をチームのメンバーとして連れて行ってくださって、スイス全土のペスタロッチーに関わる遺跡を回りながらペスタロッチーに関わる様々なことを教えてくださいました。そのご縁が今、銭谷先生につながっていると思うと、なんだか胸が熱くなるような思いがします。

それではここからスライドを使って説明します。これは、ビル村にあるペスタロッチーのお墓です。ここに、墓碑銘が書いてあり、向かい側に教会があります。その教会の壁には、日本のペスタロッチー研究の第一人者である長田新先生の分骨されたお墓があります。

これは「瀕死のライオン像」です。スイスは非常に貧しい国だったので、フランス革命の時に若者がフランス軍の兵隊となって戦っているんです。それではいけないと政治的経済的に自立した国家を目指したのです。そういう時代です。

これはシュタンツ孤児院のペスタロッチーを描いた絵です。自分のことをお父さんと呼ばせて、戦争で親が亡くなった孤児を集めて教育をした、シュタンツ孤児院の様子を描いたものです。

ペスタロッチーはどういう人かと言いますと、スイス・チューリヒに生まれて、ブラウミュンスター、グロースミュンスターという教会に行って勉強をしました。今でいう学校のような役割を教会が果たしていた時代です。教会に行って勉強できるのは市民の子どもなんです。

ペスタロッチーの父親は市民だったので、お父さんは早く亡くなって家は裕福ではなかったんですが、彼は大学まで行っています。これが子どもの頃過ごした家で、チューリヒの町の中にあります。

お父さんは早く亡くなったのですが、亡くなる時に女中さんのバーベリに、「あなたがいなくなったらうちの家はやっていけないから家を助けてくれ」と懇願したんですね。バーベリはその言葉を忠実に守って無償でペスタロッチー家を支えてくれるんです。それがペスタロッチーの母親への尊敬、女性に対する尊敬につながったのではないかとわれています。お父さんがいないので、郊外のヘンク村の牧師だったおじいさんのところに行き、一緒に村々を回っていました。その時に、町の子どもはみんな服を着てちゃんと学校に行

っている。でもこのヘンクの村の子どもたちは裸のまま、上半身裸のまま働いている、食べるものもないような状況だというのをペスタロッチーは知るんですね。「牧師になって貧しい人を救いたい」と、子ども心に思うんです。

それで大学に行って勉強して牧師になろうと思うんですけど、勉強するうちに弁護士になって貧しい人を救いたいと思うようになります。ですが、ちょっとした事件に巻き込まれてですね、弁護士になって貧しい人々を救おうと思っていたことが実現できなくなりました。当時は農業を重視する考え方があって、農業が基本だから農業をやって直接的に貧しい人を救おうと思うんですね。

それで行ったのがノイホーフというところですよ。ノイホーフというのは土地の名前ではありません。ノイホーフというのは新しい農場という意味です。農業を新しくして、農民の暮らしを良いものにしてあげたいと思うんですね。

ペスタロッチーは農業に対する知識も経験もなかったので、冷害で農作物がダメになってしまうんですね。そこで商品農業をしようとか、アカネグサを栽培して染色の材料として商品化していこうとか、いろんなことを考えるんですが、これらもうまくいかず、銀行からの融資も受けられなくなり失敗してしまいます。そこで、貧民学校を経営しようと考えます。冷害のため、親が食べていけないので、子どもを連れて物乞いをしているような時代です。ペスタロッチーは、貧民だからこそ自立しなければならないと考えて、働きながら数や言葉を覚えられるような学校を作って、子どもたちを自立させていこうと考えたのです。

その頃友人から勧められて書いた、教育小説『リーンハルトとゲルトルート』がベストセラーになって、ペスタロッチーは一躍有名にはなるんですけども、貧民学校を経営しながら、なかなか厳しい生活を続けていました。そんな時に、リーザベートという若い女性が、ペスタロッチーの志、貧しい人を救いたい、自立させたいという志にすごく感動してやってきて、無償で助けてくれたんです。そういうことが、母親とか女性への尊敬につながっていたといわれています。

その後、フランス革命があって、スイスの中央部の町シュタンツが焼き討ちに遭い、多くの子どもが戦災孤児になりました。新しい政府の要請を受けて、ペスタロッチーは戦災孤児を集めて孤児院を開くことになりました。

女子修道院の一角で学校を開くんですけど、『シュタンツだより』の中で、ペスタロッチーが、私は子どもたちとともに泣き、子どもたちとともに笑った。子どもたちの食べもの

は私の食べものであり、子どもたちの飲みものは私の飲みものだった、などと当時を振り返っているところがあります。

ペスタロッチーは子どもたちに献身し、それを受けた子どもが変わっていくんです。ずっと戦争の中で子どもは大人を信じられない、不信感に満ち溢れていた。文字も習っていない、荒れ果てた子どもたちの心が変わっていくんですね。教育というのはこれなんだと考える文字を教えたり、道徳教育をしたりしていくわけです。

その教育実践を教育論として表していくのがブルクドルフ学園です。ベルンの近くにあるブルクドルフ城の中で学園を経営し、シュタンツで実践したことを理論にしていきます。それは主著『ゲルトルート教育法』として出版され、ヨーロッパ中から先生方が来て、研修を受けるような学校になっていきます。

その後スイス革命への反動でブルクドルフ学園を去ることになり、フランス語圏のイヴェルドン学園に移りました。ここで人間教育というのは知的教育、心情教育、身体教育の調和的教育、「生活が陶冶する」ことなど、教育論を展開していきました。ペスタロッチーには生涯の夢があり、それは貧民のための学校の設立でした。これがイヴェルドンの近くのクランディに作った貧民学校です。

これは墓碑銘です。最後に書かれている「全てを他人のためにし、自分には何ものも」というところが有名で、ペスタロッチーの人生を表している言葉です。これが子どものために献身する教師の理想像を表していると思います。

最後のスライドです。これは、長田先生がチューリヒ大学から名誉学位を授与されたときに贈呈された絵画です。「闘士ペスタロッチー」といいます。子どもたちの教育のために、人間の幸福のために、それを妨げる多くのものと闘ったペスタロッチーの姿を現しています。私たちは、子どもや人間の幸福のための教育を考えたペスタロッチーを、後世につないでいく必要があると思っています。

○角屋

ありがとうございました。今のご説明には、キーワードが2つあるような気がしますね。1つは「絶対的平等感」、もう1つは、「子どもと母親との関係」。この2つが、今、鈴木先生のご説明いただいたキーワードとして捉えておく必要があるんじゃないかと思いました。ちょっと飛躍しすぎましたか、鈴木先生大丈夫ですか。

○鈴木

いえ、そのとおりです。

○角屋

それでは次の話題に行きましょうか。はい。では次の話題の「ペスタロッチャーの重要性」、今なぜペスタロッチャーかということ、今こそ必要なんですね、この考え方はね。だからそのことについてちょっとご説明いただければと思います。

4. ペスタロッチャーの重要性

○鈴木

はい、ありがとうございます。私が最近心配しているのは生成AIなど情報化の進展で人間がおきざりにされることなんですね。もちろん情報化は避けて通れないところではありますが、情報化の中で私たちが失ってしまうものもあるのではないかと考えています。ペスタロッチャーの時代も、機械化が進展していく時代です。蒸気機関車にみられるように、交通も発達してきて人間の生活が大きく変わる産業革命の頃です。ペスタロッチャーは時代の変化がもたらす人間の生活の変化について面白いことを書いています。何かというと、今まで飲んでもいなかったコーヒーをみんなが飲むようになった。砂糖を好むようになった。質素な農民の生活が根底から覆される時代が来た。そうするとそれはいけない。質素に戻そうという動きが出てきます。もう一方で、いやそれはもう仕方ない、文明の進化だと捉えて、文明の進化の中で、じゃあ人間はどうすれば自分たちを大事にしていけるのかと考える考え方とに分かれてきます。ペスタロッチャーは、文明が発達するということは一面で、人間にとって恩恵だと考えます。今まで上流階級の人しか食べられなかったものを、民衆が食べられるようになるとか、飲めるようになるとかというのは一面でいいことですよ。賃金を得ることで、暮らしぶりが豊かになってきます。マイナス面もあるだろうが、変わっていくことがもたらす良さもある。その良さというものを、人間にとっての良さに変えるためには教育が必要だとペスタロッチャーは考えるわけです。

今も、生成AIが発達しますと、人間にとって良くないからやめましょうという考え方もあると思いますし、それは必然だと考えて、うまく人間のために使っていこうという考え方があると思います。私はやはり、ここにこそ教育が大事だというふうに思っていて、生成AIであれ、何であれ、文明が発達し、知識が集積していくということの良さを、人間自

身の幸福につなげるために何が必要なのかと。それは教育だということを申し上げたく思います。例えば生成AIが発展するとほとんどの仕事なくなる可能性がある、オックスフォード大学の先生が指摘しています。人間の幸せになるように、そういう文明の発達とか生成AIの発展を捉えるにはどうしたらいいかということになると思うんです。

この夏に、機会がありまして、アリゾナ州立大学の先生とテキサス大学の先生と一緒に、生成AIに関するディスカッションをしたことがあります。シンポジウムのような会だったのですが、その中で共通に私たちが言ったのは、やっぱり人間の教育であるということでした。フロアーの学生から、「教育って言うけれども、私たちは生成AIの使い方など技術ばかり習っている。それでいいのか。」という意見が出て、いやそうじゃない、生成AIを使う人間の倫理性とか、なぜこれを使うのか、これは本当に人間のためになるのかということを考える批判的精神であるとか、論理的な思考力を人間が持つということ、もっと言えばそれが人間の幸せになるのかという道徳性とか心の問題、そういう教育こそが重要なんだと私は言いました。このシンポジウムは、広島で開催された平和に関するプログラムの一部で、アメリカから学生さんがたくさん来ておられました。プログラムの中で、生成AIに関する技術の勉強をしたらしいんです。

広島の平和式典にも出席されていたので、そこでみた「人間にとって平和は何か」という議論と、この「生成AIの技術」の議論がどうしても結びかなかったけど、今聞いて「分かった。そうか、教育なんだ」ということをおっしゃっていました。技術の進展をそのまま否定する必要はないんですけれども、本当にこれは人間のためになるのか、人間の幸福につながるのかということを考える必要があると思っています。

実際ペスタロッチーの頃はですね、「人間機械論」というのが出てきまして、人間とは何かが議論された時代でした。言葉をしゃべるのが人間じゃないか、二足歩行をするのが人間じゃないかという議論はあったんですけれども、で私たちそれを克服して今に至っています。そういうことを考えると、現代の生成AIの問題も、技術的な発展を「人間のためにどういうふうに使ったらいいのか」、「人間の幸福にどうつながるのか」ということから私たちが考え、こういう考え方を大事にしていけば乗り越えていける問題ではないかと思っています。このように思いまして、ペスタロッチーの時代、250年前のことなんて古いですよと思わずに、そこで訴えている大切なことというのは、私たちが引き継いでいくことではないかなと思っています。

言い方を変えると時代は変わるわけですよ。どうしても。同じ250年前のままではないし、

今のまま100年後も来ない。変わっていく。でも人間の本質はそんなに変わらないのではないか。人間の絶対的平等とか、愛を求める存在だということとか、本質というのは変わらない。その本質を追い求めること、本質を生かすための生き方とか技術の在り方を考えるということ、その大切さというのをペスタロッチーが教えてくれているように思っています。

○角屋

はい、ありがとうございました。教育の「人間が生きる」ということを考えるならば、1つはAIなんかに代表されているような技術の問題、それに対して人間が生きるということに対しては心の問題という形ですね。まあ認知科学なんかでは、「記号接地」ということが言われていまして、つまり単なる記号じゃなくて、全部バックグラウンドも含んだ関係を見つけて、そして生きていけというようなことを既にペスタロッチーが唱えていたんじゃないかというふうに、私なりに感じました。これはちょっと独断と偏見かも知れないのですが、…次の課題に行きたいと思います。

次の課題は、「ペスタロッチーが家庭教育で重視したこと」という形で、日常生活の中で、愛とか信頼とか感謝、感情の重視について、鈴木先生にお話しただいて、その後、銭谷先生からコメントなどがあれば追加していただくという形にしたいと思います。ではお願いします。

5. ペスタロッチーが家庭教育で重視したこと

○鈴木

ありがとうございます。ペスタロッチーは、人間の生き方とか在り方というのを考えるときの根本というのは、私たちが生まれたときの最初の人間関係である赤ちゃんとお母さんとの関係にあると言っています。かつて、母原病とかという言葉が流行って、母親が源となる病気があると言われてたり、3歳までは母親の手で育てるべきといったことが言われたりする中で、私はいったい母親の意義や価値はどこにあるのだろうと考え続けていました。そんなとき、ペスタロッチーが、人間の最初の人間関係は赤ちゃんとお母さんの関係であり、そこに道徳性の根源があるといっているのを知り、母親の大切さを認識しました。実際私がわが子を産んで育てる経験をしたときのことですが、私だけを見つめる赤ちゃんの眼差しを見たときの愛おしさとかわが子への思いというのは、言葉にできないほどのもの

であり、かけがえのないものでした。わが子への愛というのは根源的なもので、この人のために私は生きたいとか、この人のために自分を捧げてもいいみたいな思えるくらいの強く深い思いだと思います。こうした母親の愛を受けて子どもの心の中に愛が育つプロセスについて、ペスタロッチーはこう述べています。お腹がすいて泣けば、母親が自分のために何があっても駆けつけて、お乳を飲ませてくれる。そうして子どもは満足する。自分を満足させてくれるお母さんはいいものだなって思い、お母さんのために何かしたいなという愛のお返しの感情が生まれる。お母さんを待っていれば必ず来てくれると思うとそこに信頼が生まれる。ありがとうという感謝の気持ちが生まれる。それは親側からなんですよ。先生も親も子どもに求めますよね。子どもが何かしてくれたら喜ぶ。でも親からとにかく無償に与え続けるという愛、親の愛があって子どもの心にお返しをしたいという愛、信頼、感謝の感情が生まれるということです。お母さんのためにこうしてあげたいと、お母さんからの愛へのお返しをするという考え方というのが、根底じゃないかなと思います。観念的ではなくて、おむつを替えてもらって気持ちがいいとか、お乳をもらってお腹が満腹になっていい気持ちだというような感情が、愛を育てていくということが大事だと思っています。こうした母親と子どもとの間の、もともとの人間関係が大事だと思っています。

○角屋

ありがとうございました。銭谷先生、何かコメントや付け足すことがあれば、お願いします。

○銭谷

先ほどから鈴木先生のペスタロッチーの生涯についてのご説明、それからペスタロッチーの考え方、特に家庭教育において、母親と子どもの関係性についてお話しいただきました。先生のお話の通りだなと思って聞かせていただきました。本当にありがとうございました。

せっかくの機会ですので、感想なり私の考えていることを少しだけお話しさせていただきます。一番今日すごいなと思ったのは、鈴木先生が中学生の時にお住まいのところが大水害になって、それで3ヶ月ほど学校が休校になって、その間地域の中で大変な状況があって、進学できる子、できない子、いろいろ出てきたときに、人間の平等感みたいなものを考えさせられて、いわゆる絶対的な平等感というものに人は立たないといけないと思

いになったというのは、本当にノイホーフでペスタロッチーが農業経営したときと全く同じ考え方ですね、それを中学生のときにお感じになったというのは、これはすごいなと思ってお聞きをしておりました。それが最初の感想です。

二つ目ですけど、ペスタロッチーのことについて、私なりに思っていることを申し上げます。私は昭和44年、東北大に入りました。この頃の大学はご存じかと思いますが、大学紛争のピークでして、昭和44年の入試というのは東大や東京教育大の入試が中止になった年でした。非常に新入生も荒れたところに入ったという印象がありました。

私どもの入学式は途中で粉碎されました。以後、卒業式も入学式もしばらく東北大はやらなかったと思います。それで私どもが入った年には6月に私たちのいた教養部の全学ストライキがあり、そこからもうほとんど授業はない状態の時が続いていました。だから教養の頃はあんまり勉強した記憶がないんです。

ただ、2年生になった時に、一部専門科目の勉強が始まりまして、これは当時教養部のあった川内ではなく、学部のあった片平へ行って勉強をするので、ストライキやってる川内ではなくて、片平でしたから、専門の方の勉強は2年生の時に少しできました。そこで前原寿先生の授業を受けて、それで3年になって学部に進んだときも、引き続き前原先生のご指導をいただいたということになります。

実は、2年から3年に進級する時には試験ボイコット運動というのがありました。教養部から学部へ行く試験をボイコットして、結局、教養部に留年した人が半分以上いたんじゃないかと思います。

だから、3年に進んだのは、普段の年の半分以下だったと思いますので、その意味では、学部では非常に先生と親密な少人数指導というのを受けることができたので、それはそれでまた良かったのかなと思っています。それで、前原先生のゼミに参加して、卒論も前原先生が指導教官という関係でした。前原先生については先ほど鈴木先生からご紹介もありましたけれど、広島大でおそらく長田新先生の門下で、ペスタロッチーの教育思想、実践を学ばれた方だと思います。大変穏やかな語り口で、熱心にペスタロッチーについて語ってくれたのが印象的でした。当時は助教授でした。教授になられた後も、ペスタロッチーのご研究は続けておられ、1981年（昭和56年）岩波書店から、ケーテ・ジルバーの「ペスタロッチー—人間と事業—」を翻訳出版されるなど、大変活発な研究活動を展開されておられました。それから、さきほどお話がありました映画もお作りになって、東京でも上映会を、国立教育会館でやられるなどの、研究活動を展開されておりましたが、残念ながら

ら若くしてお亡くなりになりました。

前原先生がよくお話しされていたのが、教育の原点というのは母親の愛だということです。母親の無償の愛が教育の原点だということを繰り返しお話しになっておられました。そういうことを説いたのがペスタロッチーだということなんです。

今、ペスタロッチーから学ぶとしたら、たくさんあると思うんですけども、大きく言うと、ペスタロッチーの活躍した時代というのは、日本では江戸時代になるんですよね。徳川将軍でいうと、ちょうど八代将軍吉宗が将軍職を九代将軍家重に譲ったのが1745年で、その翌年の1746年にペスタロッチーは生まれている。だから吉宗～家重の時代で生まれて、亡くなられたのが1827年ですから、これは十一代将軍徳川家斉の時代です。本当に江戸時代の文化・文政の頃に活躍された方が、その時代に、教育の本当に大切な根本的な考え方をきちんと整理されたというのはすごいなとまず思います。

整理した考えというのは簡単に言うんですけど、先ほど来、鈴木先生のお話にもありましたけど、一つは子どもの貧困ということを考えたときに、子どもが貧困から抜け出すには教育が必要だということを明確に打ち出したことです。ですからまさに貧困な民衆のための民衆教育の父と呼んでいいのではないかと思います。

二つ目には、その根底には人間は平等だという考えがあることです。先ほど鈴木先生がおっしゃっていましたが、「王座にあっても、木の葉の屋根の陰に住んだとしても、人間は全く平等だ」という「人間平等論」という考え方をきちんと打ち出したことです。

三つ目は教育というのは知識とか技術を授けるだけじゃない。教育は人格形成を伴って、全体として人間性の教育、これがなければだめだということを、これも明確に示したことです。

そして四つ目には、教育の根本は愛だ、母の無償の愛というのが教育の根底にあって、あらゆる教育者はそのことを自覚して、指導に当たらないといけない、子どもを慈しむ、愛するという、母親の愛というのが一番根底にあらねばならない。

他にもたくさんありますけれども、この四つのことを、日本でいうと江戸時代にはっきり言ったというのが、すごいところだなと思います。

最後になりますが、ペスタロッチーの生涯、一生がすごいというのが、私の感じですが。先ほど鈴木先生のお話にもありましたが、ペスタロッチーはいろいろなことをやっているんです。最初はノイホーフで農業経営をやりますが、これ失敗するわけです。これは確か資金が足りなかったんじゃないかと思えますけれども。それから貧民学校を経営するんで

すけれども、これもうまくいかないんですね。それから、孤児院で孤児の教育をやります。シュタンツでやるんですね。6ヶ月で確か閉鎖になっている。それからブルクドルフで小学校の先生をやりました。なかなかそこも落ち着いて授業するわけにはいかなかった。それからイヴェルドンで教員養成の学校をやるんですけども、派閥みたいなものがいろいろあって、それもうまくいかない。まあ、簡単に言うと失敗の連続なんです。でも不撓不屈なんです。倒れない、屈しない。だから、なんて言うんでしょうか、そういう生き方というのがですね、自分の信念、考えに従った生き方というのが、一番すごいところだと思います。

現在でも、やっぱりペスタロッチーは、近代教育の大元というか、みんなが尊敬する人だと思います。私の場合は、今お話ししたようなことはほとんど全て前原先生の受け売りです。数十年前の知識なので、最近の研究はもっと変わっているかもしれませんが、そんな印象を持ちました。本当に鈴木先生、素晴らしいお話をありがとうございました。

○角屋

ありがとうございました。それでは、先生にもう一つ、愛とか感謝とか信頼とか、同心円的に広がってきている形の考え方がありますよね。それについて、ご説明いただければと思います。

6. ペスタロッチーから学ぶこと

○鈴木

ありがとうございます。今おっしゃってくださったのは、同心円的に広がっていくという考え方ですけど、当時の社会というのは新しく市民社会になっていきますので、人間が中心の社会を作っていくと考えたときに、家庭の中あるいは日常生活の中で生まれていく人間の愛を中心として、母親への愛から父親、兄弟、地域社会に住む同胞へと広がっていく、そのような社会を考えたのだと思います。けども社会というのは思い通りにはいきません。私たちがそれぞれ自分たちの好きなようにやっていたのでは社会は成り立たないわけです。社会を成り立たせるためにこれに従いなさいと、封建的な考え方があったわけですけど、それに代わる何かを考えたときに、銭谷先生もおっしゃってくださった愛、人間の愛を中心とした社会を考えたのです。そう考えると、ペスタロッチーが、愛、感謝、

信頼に加え、従順を挙げていることに注目したいと思います。母と子どもの中で生じる愛、感謝、信頼、従順のうち、愛、感謝、信頼は感情だといっています。お母さんありがとう、お母さんのためにこうしたいということから生まれてくる感情です。だけど従順は能力だといっているんです。

それはなぜかという、従順になるということは、自分がこうしたい、ああしたいという思いに逆らうものですよ。こうしなければならない、従わなければならないということです。この能力がどうやって生まれるのかというと、いつもお母さんが泣いたらすぐ来てくれたのに、今は来てくれない。お母さんは自分の仕事をやっている。自分だけを見ているわけではない。自分より他にも何か大事なことがある。だけど、待っていたら、お母さんは満たしてくれる。自分のそばに来て欲しい思いとか、空腹とか、そういうものを満たしてくれる。待つことはいいことなんだという感情が生まれていく。そのようにお母さんを待つこと、待たねばならないこと、我慢すること、耐えること、それはよいことだという経験が、従順の能力を育て、次第に市民としての権利や義務の意識に発展していくとペスタロッチーは考えたのです。

同胞と一緒にうまくやっていくような生き方をしていくということ、それはいいことなんだという考え方は、最初は待たねばならないという消極的な感情から、待つことは良いことなんだ、人を喜ばせることなんだという積極的な感情に変わっていきます。それとともに、お母さんのためにから、お父さんのため、兄弟のため、同胞のために、という考え方にだんだんと広がっていくと考えたのです。

それは市民社会の一員としての考えでもあります。私たちも普段社会に生きていて、いろいろな決まりがあって、決まりを守らなければならないというときに、それが罰があるからとか、それをすると怒られるからとか、というように思うのではなくて、このことをすることで周りの人のためになる、お母さんは喜んでくれる、お父さんも喜んでくれる、周りの人が幸せになるという考え方からルールを守ろうという主体性が生まれる。

そういう考え方によって、市民社会が成り立った場合、温かい社会といったらいいのでしょうか。決まりがある、守らなければならない、守らないと怒られる、だから守るとい社会は、人間同士の関わりが何かギスギスするようなどころがありますけども、そうではなくて、決まりは人々の幸せのためにあるんだと考えて、お互いの幸せのために社会を成立させていくことをペスタロッチーは望んでいたように思います。

人を育てるといのは愛だと思うんです。何かルールがあって守らなきゃいけないから、

それを守らなかったらあなたはダメですよ、ではなくて、ルールというのはみんなが幸せに公平に生きていくために作られているものなんだから、お互いに守っていきましょうということ、基本原則は人間の幸せのためなんだという考え方ですね。温かいなと私は思いまして、ルールを守ることだけでなく、いつも人間の幸せを基本原則として考えることが大切だと思います。

○角屋

ありがとうございます。何か銭谷先生、教育のこと、特に銭谷先生は教育基本法とか学校教育法など、非常に高度な法律に関わられて、それに期待することや関連づけてのお話をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○銭谷

家庭で身につけた愛、感謝、信頼の感情はだんだん広がっていく。そこは実は先生がおっしゃるように教育では一番大事なところだなと思うんです。

今、角屋先生からありましたけど、教育基本法でも、今までは一条に「教育の目的」というのが書いてあって、人格の完成と健康な国民の育成というのが教育の目的だということになっていたんです。新しい教育基本法では、一条はその通り書いてあるわけですがけれども、二条というのを新設して、教育の目的を達成するための具体的な教育目標を五つ決めたんですね。母親からの愛だけじゃなくて、今鈴木先生がお話しされた、他人と関わったり、社会と関わったりする中で、子どもが必要な資質や能力を育てていくということが大事だというのが教育の目標の中に書いてあるんです。

実際に、例えば「道徳性」ということで見てみると、もっとそれがわかりやすいんですけども、学習指導要領で道徳というのは、指導項目がいくつか書いてあるわけですね。実際には20ぐらいです。それはただ羅列するんじゃなくて、観点を設けて、四つの観点から整理して書いてあるんです。それは一つは、「自分自身に関すること」で、自分自身がやっぱり自立したり、自己研鑽したり、耐えたりですね。そういう自分自身を鍛えあげるようなことが大事だということ。自分自身に関することで指導項目が何項目か出てくる。二つ目は、「人との関わりに関すること」、「集団との関わりに関すること」ということで、要するに他人との関係ですね。人間というのは一人で生きているわけではないので、母親、肉親、肉親以外にもいろんな人と関わりながら生きている。例えば学校に行くとクラスと

いうところにたくさん友達がいるわけですから、友情とか、約束を守るとかですね。そういう他人との関わりに関することが大事なことだと記しています。

三つ目は「社会との関わりに関すること」。自分が先にあるんじゃないくて、社会があるところに自分は生まれて育ってきたわけですから、社会との関わりで、規則とかルールを守る、公共のために尽くす、文化や伝統を大切にし、それを育んできた郷土や国を愛する気持ちを持つなどの、そういう社会との関わりに関することが大事だよというのが三つ目に出てきます。最後四つ目は、人間が自然環境と関わって生きているわけですので、「自然とか崇高なものとの関わりに関すること」ということです。道徳教育はこの四つの観点で整理されているということは、教育の目標にもつながる大切な視点だと思います。

このように道徳教育を例にとっても、自分自身から、他人、社会、そして自然との関わり方を学べるように今の指導要領はできているわけで、教育基本法の仕組みというのは、知、徳、体、情操に関わる人間としての資質能力の育成について、そういう意味では一貫した考え方を持っているので、非常に大事なことだなと思いました。

ペスタロッチー自身も「学校は家庭の居間の雰囲気満たせ」と言っているわけです。普通は家庭の居間の雰囲気満たせというと、そこにはお母さんがいて子どもたちがいると捉えられていて、家庭の居間というのはお母さんがいて子どもたちがいて、お母さんがいろいろ子どもたちに愛情を注ぐ、あるいはお母さんもお母さんの用事をしたりしながら、子どもは用事をしているお母さんでもその愛情に包まれて、本を読んだり勉強したりしている。そういう母親と子どもがいるのが家庭の居間と大体捉えられているんです。ただ、よく考えると家庭の居間というのはそこには兄弟もいるわけですし、お父さんも仕事から帰ってきて「ただいま」と入ってくるかもしれないし、あるいはおじいさんもいるかもしれない、おばあさんがいるかもしれない。あるいは他人が、「今日泊めてくれ」と言って来るかもしれないし、物を売りに来る人がくるかもしれない。そういうことで家庭というのは一つの社会というか世間というか、そういうものとの関わりの中になってくるのです。そういう意味でいうと家庭というのは生活の場なので、これ後で出てくると思うんですが、結局、生活の場そのものが教育ということになるように、だんだんようになってくるということではないかと最近思うようになってきているんです。今のお話をお聞きして、なるほどなと思いながら伺っておりました。ありがとうございました。

○鈴木

今、銭屋先生がおっしゃってくださった中で、そうだったなと思い出したんですけど、今は学校のことが居間に入ってきていますよね。学校で勉強しなきゃいけないから、家庭でも勉強しなきゃいけないし、学校とか社会でこれが必要ですよということで、家庭がそれに合わせるようになってしまっています。逆だということを、銭谷先生がおっしゃっているのをお聞きして、ペスタロッチーが、学校は家庭的な雰囲気であるときにのみ、人類の幸福に貢献するということをいっていたことを思い出しました。銭谷先生がおっしゃってくださったように、家庭的な雰囲気、居間の雰囲気、愛情深く子どもを見守り育む雰囲気、そうした家庭的な雰囲気が満たされていない学校は、人類の幸福に貢献しないということをいっています。ペスタロッチーは自分のことを先生ではなくお父さんと呼ばせて、学校を一つの家庭のようにして、年齢の違う子どもたちを兄弟姉妹のように育てているんです。学校が、居間のような雰囲気、家庭的な雰囲気に満たされているということが、大事なんじゃないかなと思います。

○角屋

はい。ありがとうございます。最後の方のテーマに入ってきましたんですけども、陶冶という言葉ですよね。私も大学に入ったときに形式陶冶とか、実質陶冶とか、何かわけがわからない、教育学部で科学を勉強したいのに、何だか陶冶と言われると、さっぱりわからない、異次元の世界で、よくわからなかったんですけど、この陶冶ということについて、コメント、あるいはペスタロッチーから言ったら、陶冶とはこういうふうに考えられるんですよ、ということをお話しいただければと思います。

○鈴木

はい、ありがとうございます。「陶冶」についてですが、漢字で書くと、陶は、陶器の「陶」で、冶は冶金の「冶」ですね。なので、かつては一つの型に入れる、というふうに訳されていたときもあったんですけど、今は、物事の本質を練って作り出すという意味で使われています。ここから、教育においては、子どもが持っている本質を引き出し、育て上げるといった意味で使われています。

ペスタロッチーに関していいますと、ペスタロッチーは「生活が陶冶する」という有名な言葉を残してしまっていて、だから陶冶は人間教育とも言えるんですけども、生活そのものが人を教育するんだということを言っています。その当時は農業が主だったわけですね

れども、農業からだんだんと工業社会に変わっていくときです。工業社会に合うように人間を変えていく、変えなくてはならなくなった時代でした。

私たちは当たり前のように朝8時半ごろに出勤して夕方5時ごろまで働きますけど、この習慣は農業にはなかったものです。産業革命の進展に伴って、工場労働に適した労働者を育成することが教育の課題になってきました。そうした中で、多数の労働者を効率的に育成する方法として、ベル・ランカスター方式が流行りました。これは、たくさん子どもたちを一斉に教育して、同じようなことができる人たちに育てていく方式です。ご存じだと思いますけども、200人くらいの子どもの、一斉に教育する方法が世界的に広まってきました。多くの子どもを同じように教える方法に対して、ペスタロッチーが主張したのは、教育というのはもっと小さい範囲、家庭やそれを取り巻く生活圏の中で、子どもたちが自分の必要に応じて学んでいく、身につけていくことだということです。

例えばコップで水を飲むという行為は、親が子どもに代わって行っていたら、子どもは何も学びません。水の入れ方、コップを持って運ぶのに適した量、こぼさないように運ぶためのバランスの保ち方、歩き方など、コップで水を飲むという小さなことの中に、子どもが経験的に学ぶことがたくさんあります。

そういうのは、子どもたちが生活の必要の中で学び、身につけていく力です。生活の中の必要が子どもたちを育てていくという考え方です。生活の必要ということ考えたときに、ペスタロッチーは困窮という言葉を使っているんですね。必要という言い方ではなくて困窮、足りなさです。私たちは満たすことが大事だと思っていますよね。

子どもが、これが欲しいといえば満たす。あれをやりたいといえば満たす。それが親の愛と考えがちです。でも考えてみれば、困窮こそが人を育てる。足りなさが育てるといえます。例えば、ここにパンが三つあって4人の子どもがいる。この三つをどう分けるか。足りないから考えます。3人子どもがいて3人パンがあったら1対1になりますから何も考えないですよ。足りないから考えるのです。

困窮は、パンのような問題だけではなく、日常生活において普通にあることですし、自分の人生においてもあることです。足りなさというものは人を育てるといいますか、足りなさを克服するために考え工夫し力をつけるというところがあります。

以前、面白い算数の授業をみたことがあります。それは分数の時間で、12個の飴を3人で分けましょうという授業でした。先生が、12個の飴を3人で分けましょうといったら、四つずつかなと思いますね。ところが、ある子どもがパッと手を挙げて、「3、4、5に分

けます。なぜかという、自分は3人兄弟で自分一番上なので5個、二番目の弟が4個、一番下の弟が3個、に分けます。体の大きさを分けます。」と発表しました。確かに先生は、同じ数に分けるとはいわれませんでしたので、間違いではありません。生活の中で、3人兄弟で与えられた数を分けるときに、どう分けたいのか、平等って何だろう、公平って何だろう、というように考える、そういうきっかけになるんです。それが工業化された社会の中で、たくさんの人を同じように育てなきゃいけないという中では、覚えるだけの教育になっていったわけです。

日本では、先ほど銭屋先生がおっしゃってくださったように、様々な法律の改正を通して、自ら考え、判断する主体的な力を育成する教育になってきています。今、個別最適というふうな流れの中で、一人ひとりに応じてということになりますけれども、それは決して一人ひとりに応じて豊富に与えることではなくて、子どもたちが自分の足りなさとか、これがしたいけど状況的にできないというような困窮とかの中で考え、実際にやってみながらつけていく力じゃないかなと思っています。

大事なことは、足りなさにせよ、それを克服するときにはせよ、そうやって身につく力というのをいつも愛に結びつけているということです。誰のために、何のために、人間のためにというように考えるということなんです。知識が人間愛、人間のためになる、人間の幸福につながるというように愛につながっているときに初めて人間として成長する。

じゃあ心だけでいいのかというと、人間は心だけではないわけです。人間の教育には三側面、知識の教育、知識があるという知的な面、それができるということ、技術があるという技術の側面、それが人のためになる、人間のためになるという心の側面、その3つが結びついた調和的な発達をペスタロッチーは重視しました。調和的な発達は、狭い家庭の範囲、生活に密着した範囲で養われるということをペスタロッチーはいつているのです。

人間の調和的な発達の中心に、心、愛をおいているのがペスタロッチーの特徴であり、私たちが学ばなくてはいけないところだと思っています。最初のところで生成AIのことを出しましたが、これからも技術は発展していきます。技術の発展が人間の心や人間愛と結びついた時に初めて人類の幸福につながっていくというのが、ペスタロッチーの考え方から学ぶことのように思います。

○角屋

ありがとうございました。何か銭屋先生ありましたらお願いします。

○銭谷

生活が陶冶するというのは本当にいい言葉だなと私は思います。さっき角屋先生が実質陶冶や形式陶冶の話をされましたけど、最近あんまり流行らないですよ。

簡単に言うと、実質陶冶というのは、今、鈴木先生のご説明でもだいたいお分かりになったかと思いますが、どちらかという、例えば教科に即して言えば、教科そのものの目標ですね。数学なら数学的な知識、理科なら科学的な知識というものを見つけたり、あるいはそれを獲得するための技術とかですね、そういうものを教えたり見つけるのを実質陶冶と呼んでいます。形式陶冶というのは、実質陶冶の背後にある感性とか倫理観、学ぶ態度や方法、思考力、判断力などの資質能力を育てることを重視する考え方をいいます。生活が陶冶するという場合は、生活全般が実質陶冶や形式陶冶を含めて大変な教育の場であるということを行っているんだろうと思います。

私の場合、学生時代は22～23歳で終わってるわけですけども、高校時代、大学時代を考えると、高校、大学に行って、そこで先生方とお会いをしたり、友達と話したり、高校、大学のいろんな活動に参加したりしていること、それ全体がやっぱり教育の場だったなという思いを今、強く思っています。

大学の時の話をすると、私が学んだ東北大の教育学部には、合同研究室があり、合研合研と呼んでいましたが、そこは3専攻が一緒になったところだったので、助手の方が3人いらっしゃったんです。3人が一緒の部屋に入っていて、そこには大学院生や学部の学生がしょっちゅう顔を出して、いろいろ先輩の話を聞いたり、この本を読んだらいいというものを紹介してもらっていました。

それから、3年と4年の時、それぞれ年に1回、泊りがけの研修旅行がありまして、助手の先生方が中心になって日程を組んで連れていってくれる。合研が大学における自分の居間のような感じで、そこに行くところで生活しているんだ、勉強しているんだという感じがすごくした思いがあります。

今思うと、大変な方がそこにたむろしたわけで、上越教育大の元学長の若井彌一先生、三重大学の教育学部長になられた神山栄治先生、秋田大学の副学長、教育文化学部長をやられた對馬達雄先生とか、そういう方が助手とか院生でいて、難しい話も多かったけれど、面白い話もいろいろ教えていただいたなという感じがしています。ちょっと話が逸れて恐縮なんですけど、その中の對馬先生から最近、「ナチスに抗った教育者」（岩波ブックレッ

ト) というご著書をいただきました。

ナチスの時代にドイツのベルリンの近郊で国民学校の先生をしていたライヒヴァインという人がいる。もともとは大学の先生で、大学を去って、国民学校の先生になった。8学年あって子どもはたった40人しかいない。ベルリン郊外の農村学校の先生になって6年間先生一人で40人の子どもの教育をした。でもそのやっけることが、ペスタロッチーがやったこととほとんど似てるんじゃないかという内容です。小さな村も世界に開かれているという感じで、村の伝統や行事を大切に、主体的な自己形成を図って、クラスの仲間とも共同、助け合い、あるいは労作、作業をするなど、共通体験を通じて自己形成を図っていく。それから行事を非常に大切にする、日常と非日常を作りながら教育していく。

例えば2週間ぐらいにわたる上級学年の子どもを連れての大修学旅行みたいなのをやるんです。実はライヒヴァインは、ナチス転覆を結局考えて失敗して、ナチス政権に殺されるわけですけど、もしナチスの政権が変わったら文部大臣になったと言われているような人です。教え子たちが戦後話しているのは、この先生がやった教育は決して知識の詰め込みに熱心ではなかったと、体罰とかは一切なかった、他人に尽くす、他人を助けるということを自分たちに教えてくれたというものです。これはペスタロッチーのお墓に書いてあることと一緒になんですね。結局、多分このライヒヴァインという方もペスタロッチーの教えは勉強された方だと思うんですけど、結局、他人を助けるというのが人間の生き方なんだということを自分たちに教えてくれたという感想が書いてあります。

そういう意味でいうと、ペスタロッチーというのはすごいんだなと思います。このライヒヴァイン本人も死刑になる前に娘に宛てた手紙でも、「人を助けたり親切にすることということが人間にとって一番大事なことですよ」ということを書いているということです。そういうペスタロッチーの教えというのは、ドイツにも脈々と、ナチス時代でも生きていたということを思いました。

○角屋

鈴木先生、何か銭谷先生に対して、ペスタロッチーの方から、こういう文脈で捉えますよというのがあれば、ご紹介いただけますか。

○鈴木

今、お名前を出された對馬先生は、ディースターヴェークという人の研究をしている方

です。ディースターヴェークはペスタロッチーの人生や思想に深く影響を受けたドイツの教育学者です。對馬先生は、前原先生の影響を受けてディースターヴェークを研究され、そのことは錢谷先生がご紹介された今の研究にもつながっているのだらうと、何か脈々としたつながりを感じながら聞いていました。

ちょっと話を元に戻すのですが、錢谷先生が江戸時代のことを話されたときに思い出したのですが、江戸時代の末期にペスタロッチーはすでに日本に紹介されていました。スイスで貧しい子どもたちを助けて教育をしている人がいるらしいというような情報が、蘭学者を通して日本に入っていたようです。それもあって明治以降にペスタロッチーが日本の中で広まっていったのではないかという見解もあります。もう少しするとペスタロッチー没後200年になります。2027年の生誕200周年を記念して、何か事業をやろうと日本ペスタロッチー・フレーベル学会で考えているところです。生成AIに代表されるように、情報化が進んでいる時代だからこそ、もう一回教育の原点に帰って、人のために生きること、人を助けたり親切にしたりすることを喜びとするのが、人間の根源的な感情なんだということを、もう一度呼び起こす必要があるように思いました。錢谷先生がおっしゃってくださったことは非常に心に残りました。

○錢谷

ありがとうございます。對馬先生はディースターヴェークの研究をずっとされておられました。実は私の卒論は前原先生ご指導で、ペスタロッチーは恐れ多かったので、ディースターヴェークにしたんです。對馬先生からいろいろと本をお借りしてやりました。今、お話を聞いて、ディースターヴェークは1848年のドイツ三月革命の頃、ものすごく活躍をされた方なんですけども、懐かしく思ってお話を伺っていました。ちょっと余計な話なんですけど、生活が陶冶するというこの言葉は、高校時代に何回か聞いておりました。私の高校の校長先生は、「秋田のペスタロッチー」と言われて、秋田では有名な先生で、鈴木健次郎先生と言います。決め台詞がたくさんある校長先生でして、いまだに卒業生、あるいは在校生にも伝わっている一番有名なものは、『「汝、何のためにそこにありや』と人に問われても、ただちに答えの出せる自覚的な生活をしなさい。」「汝、何のためにそこにありや」というのが、我々の高校の合言葉みたいになっています。いまだに不思議と在校生にも伝わっているんです。

その先生がよくおっしゃったのが、「生活が陶冶する」。それはどういうことかという、

学校というのはいわゆる教科の授業を受けるだけのところじゃない。朝から夕方まで君たちは学校で生活しているわけだから、生活全体を充実しなければいけない。いわゆる部活、生徒会、学校行事、そういう様々な活動が学校にはある、もちろん極端に言えば清掃から登校、下校の時間までであるわけです。いつもその時に自分は何をして、どういう立ち位置にいるのか、何しなきゃいけないのか、そういうことを考えながら生活しなさい。生活が陶冶する、生活が君たちを鍛える。ということで、部活も随分一生懸命ご指導いただいて、当時全国的にも、わが高校も剣道が全国優勝、野球やラグビーが全国ベスト4までいくとか、そういう時代があったんです。生活が陶冶するというのは、自覚的な生活につながるのかなと思って懐かしく聞いておりました。

○角屋

どうもありがとうございます。貴重なお話を。はい、それでは時間も迫って参りましたので、質疑・応答に入りますが、ご質問などがあれば、どうぞよろしくお願ひします。

7. 質疑・応答

○山田

新学社で教育対話主事をさせていただいております、山田と申します。今日は先生方のお話を伺わせていただいて本当に勉強になりました。ありがとうございます。

ペスタロッチャーについては、大学受験の勉強をしているときに出てきたのが最初の記憶です。しかしそんなに深くは勉強していませんでしたし、忘れてしまった部分もたくさんありました。改めて、教育の非常に大事なことについて、実践を通して伝えてきた方だったということが良くわかりました。

お話を伺いながら、自分が担任の時のことを思い出しました。初めて担任になった時に、先輩の先生から「クラスというのは家庭的な雰囲気満たされているのがいいんだよ」と教えてもらいました。「学校は家庭的な雰囲気の時にのみ人類に貢献している」という言葉ではなかったんですが、なるほどそうだなと思いました。では、家のようにするにはどうしたらいいかと、考えました。最初に思いついたのは、子どもたちが休み時間や音楽、図工の授業で教室を出ていくときに、「行ってらっしゃい」って声をかけることでした。すると帰ってきたときに、みんなが「ただいま」って、ニコニコしながら帰ってくるんです。この関係、あったかくて、ちょっといいかなと思いました。その次に自分が試したのは、

「わからない」と言えるということです。家ならば、分からないことやできないことを、割と恥ずかしがらずに言えるでしょう。でも、学校ってどうしても恥ずかしくて「できない」「わからない」と言わないし言えない。でもそこがすごく重要です。例えば、算数の授業中に「私、先生、ここが分かんないんです」って言えたら、すごく素敵だなと。ものすごく勇気がいることですが、それが言える学級だったらいいなあと思って、子どもたちに伝えながら挑戦したんです。すると、ある日、算数の授業中に一人の女の子が「ここが分からないんです」と言えたんです。クラスの友達も、その子が分かるように説明をいっぱい考えてくれました。その子が「分かった！」ってニコってしたときに、周りがすごい歓声を上げて喜びました。「分からないって言えるのはすごいね」「みんなが一緒になって考えてくれて、一緒に喜んでくれたね」と伝え、私も子どもたちもみんな、とてもあたたかい気持ちになりました。その後、「分からない」「教えて」と言える子が少しずつ増えていき、周りの友達も一生懸命応援してくれました。

これが今教えていただいたペスタロッチーの考え方のような「家庭」だったかどうかは、自信ありませんけれども、みんなが許し合えたり、支えあったりという学級づくりに少し近づいたかもしれないなど、お話を伺いながら感じました。

今日は「生活の陶冶」という言葉も勉強させていただきました。お話を伺う中で、こんなふうに理解しました。それは、「窮屈」や「足りなさ」が人間に課題を抱かせ、それがやる気や意識を引き出すきっかけとなるということです。人は、足りないと思うと何とかしようと思う。そこに意欲、意識、やる気生まれる。その課題意識がすごく大事です。何とかこれを満たしたい、何とかして解決したいと考えるので、自分の身になっていく、力になっていく。最初は自分のためかもしれないけれども、社会のため、人のためにもなってくる。改めて課題を見つける力というのはすごく重要だと思いました。学校の授業でも、解き方も大事だけど、そこに課題を見つけることで自分の問題として意識するので、次に進んでいく原動力になります。そういう意味で陶冶するということ、困窮と関連づけて捉えました。狭い考えかもしれないですが、そういう考えもよいのかなというのをお聞きしたいと思いました。

三つ目は生成AIのことです。今自分の仕事の中でもとても気になっていることなので、興味深く伺いました。私も、「生成AIが発達しても教師はなくなる職業の一つ」だという理由を自分なりにとらえていました。今回のお話を伺い、倫理性や道徳性、批判的思考などを身につけさせてあげるのが人の力であり、そこが、「人間の教育は生成AIには変わっ

てはできない」という理由であると改めて勉強させていただきました。ありがとうございました。

○角屋

ご質問について、お二人の先生方、コメントがあればお願いしたいと思います。

○鈴木

はい、ありがとうございます。「行ってらっしゃい」、「お帰り」っていいなと思いました。以前、小学校の見学に行った時に、トイレに行っていて授業に遅れてきた子どもがいた時に、その子どもに「大丈夫です。ゆっくり入ってください」と子どもたちが言っているクラスがあってですね、家庭的だと思ったことがあります。「遅くなったね。時間までにちゃんと帰らなきゃいけないよ」と注意するのではなくて、みんなが分かりあっているようなところがあって、とても温かい雰囲気だったことを思い出しました。

間違いを許し合えるというか、間違いから学ぶのは大事なことだと思います。ペスタロッチーから学ぶというのはやっぱり弱さとか、わからなさとかが人間にはあるということをお互いに認めて、だけどそこに留まらず、何とか変わっていこうと思う、それが人間なんだということ、その意思とか意欲とかを引き出し伸ばしていくところに人間の教育があるということのように思います。先生が今おっしゃったように、足りないからこそ、自分を変えていくというのは、自分の弱さを認めていく、わからなさを知っていくところが人間らしいし、人間の教育だなと思いました。

何かを知りたいと思ったときに、こうすればいいんじゃないか、ああすればいいんじゃないか、こう調べればいいんじゃないかというふうに自分で考えて構成していくことの大切さをおっしゃっていたように思いましたので、それも含めてペスタロッチー的だと思ひまして、よく理解していただけたと思いました。ありがとうございました。

○角屋

ありがとうございました。その他何か。はい、どうぞ。

○品川

山田先生と同じ部署で働いております教育対話部の品川泉と申します。今日はありがと

うございました。まず、ペスタロッチーの生涯の仕事を鈴木先生の手記で拝見して読んでみると、本当に不撓不屈の人生で、こんなに苦しいことがあってもなんでこんなに頑張れるんだろうと心が打たれて、すごいと思うのと同時に、いい具合に他者からの支えがあることが不思議だなと思いました。

もう一つは、今日のお話で鈴木先生がおっしゃっていた「愛し返し」というフレーズに共感しました。親として初めて子どもに向き合ったときは、親からの愛情に対して子どもがほほえみを返してくれるだけで十分満足していたんですけども、子どもがだんだん育っていくと、子どもから何かもっと返されることを求めてしまうので、改めて子育ての原点に立ち返らせてもらったと思います。子育て中のことを思い出すとどうしても日々の大変さに、気持ちがいつまでも、生まれたときのことを忘れがちなんですけど、そのことを常に思い出せるようにしたらいいなと思いました。

それにも関わるんですけど、愛とか感謝とか信頼の感情や従順の能力というのが、同心円的に広がっていくためには、中心がなければ広がらないので、家庭がすごく大事だと思いました。その中で、今の社会って家庭で社会適応させなさいっていう圧がすごくて。特に母親に対して。本当はそれじゃいけないんだけど、家庭までもが、社会適応させようっていう場になりつつあって、ペスタロッチーがお勧めしている、家庭が居間の雰囲気ってところから、少しずつ逸れていってしまう部分があるような気がしています。例えば、子育て中の方が、公共の施設で子どもが騒いでいるときに、「警察が来るよ」とかそういう叱り方ではなくて、「静かにすると周りの人がいい気持ちになるんだよ」とか、伝え方ひとつで少しずつ変わってくるのかなと。理念としてはとても素晴らしいことですが、それをどう、今、困っているお母さんたちに、伝えればいいのかと考えたときに、例えばそういう伝え方なのかなと考えました。いかに周囲の幸せのために動ける人間になるかがすごく大事なことだと思うので、そういった人に育てるための子育てが、ペスタロッチーの考えに繋がっていくのではないかと考えています。

具体的にどう保護者に伝えていったらよいか、アドバイスをいただけたらと思います。

○鈴木

ありがとうございます。ペスタロッチーの人生は、不撓不屈、失敗の連続なんですよね。失敗から立ち直ることの連続だったように思います。ただ、私がペスタロッチーを研究して思ったのは、自分がやりたいことをやり通した人生だったんじゃないかということなん

です。貧しい子どもたちを助けたいと思って助けて、失敗したけど今度は違うやり方で助けたいと思ってまたやって、うまくいかなかったらこっちやってみようってやって、苦難は多かったけれども、ずっと夢を追い続けた人生だったように思います。

ペスタロッチャーは、自分が貧しい人たちを助けたいと思った子どもの時、ほんの小さな小学生の頃に持った夢をずっと持ち続けて、やり方は変わったけども最後までやり続けた、幸せな人生だったんじゃないかなと私は思いました。女性が助けてくれたのは、その女性たちが、ペスタロッチャーが子どもたちに対して持っていた無償の愛、それがわかる人たちだったのだと思います。バーベリも、リーザベートも、ペスタロッチャーは貧しい子どもたちのために一生懸命事業や教育をやっているということを知って、この人の力になりたいと心から思って助けに来たのです。

ペスタロッチャーがやっていることは人のためになる、人類のためになる。そこに純粋に賛同し助けたいと思ってくれた人がいたということで、そういう共鳴があったんだろうなと思います。ペスタロッチャー自身は、だから女性は素晴らしいと思ったようで、当時はまだ母親の教育力などという考え方が全くない時代で、女性の教育もほぼないような時代だったにもかかわらず、母親の教育力を重視する考えを持ったのは、そういう人生だったからかなと思います。

居間の雰囲気の子育て中のお母さん方にどう伝えていくかということは、今おっしゃったことでいいと思います。お母さん方の中で流行っているのが、鬼が来るぞといって、鬼が怒ってくれるアプリがあるらしいんですね。それを使って怒るのではなく、なぜそうしてはいけないのかということの説明することが大事だと思いました。

私は幼稚園や保育園の先生方を対象にした研修をやっていたことがあるんですけど、ワークショップの形式で、「幼児がおもちゃの取り合いをしています。これをどうやって解決しますか」といった課題を出して、実際にロールプレイングをしていただいたことがあります。日本の幼稚園の先生方は、「叱られるよ」とか、「後で困るよ」とかいうように、その場が収まるような指導をされることが多かったです。国際学会のワークショップでも同じ課題を出したことがあるのですが、その時アメリカの方がですね、「本当の友達でいたかったらどうしたらいいの？」っていうような聞き方をされるんですよ。「ずっと仲良くしたかったらどういうふうにしたらいいの？」というように、子どもに考えさせるような言い方なんです。「かわりばんこのルールを作りなさい。」「こうして喧嘩しないようにしなさい。」じゃなくて、「友達って何なの？」「仲良くするにはどうしたらいいの？」という言い

方をされていて、「価値」で考えさせているんですね。さっきおっしゃってくださったのは、周囲の幸せのためにという価値を伝えていらっしゃいますよね。みんなが怒るからじゃなくて、みんなが幸せになるためにとか、他の人が本をちゃんと読めるようにするにはどうしたらいいと思う？とか、自分が本を読んでいるときには静かにしてほしい？とか、ですね。そうすると子どもは考えますよね。価値を考える。そういうふうに子どもに大切なことを考えさせる言い方、話し方は、子どもが自分の行為を抑制したり、もっとやろうと思ったりするときの、自分の考え方や判断の基準を作ることになると思うんですよ。

もしお考えになるんだったら、基準として子どもに伝えたいことを言葉にする。「ゴミを拾いましょう」というときには、「ゴミを拾わないと怒られるから」ではなくて、「こうするとみんながいい気持ちになるよね、いい気持ちで過ごすっていいことだよね」というように価値をお話し、説明されるというのがいいのではないかと思います。日本の幼稚園や保育園の先生方は目の前のいさかや喧嘩を収めることを求めておられるように思いましたが、アメリカやフィリピンの方は行為の奥にある価値を、子どもにわかる言葉で伝えていらっしゃる。それがとても印象的でした。以前、幼稚園で「公共」を教えるときに、「みんなのためにありがとう」という標語を作ったことがあります。子どもにわかる言葉で価値が伝わるような言葉をいくつかお考えになってみてはと思います。ありがとうございました。

○角屋

銭谷先生、何かございますか？

○銭谷

私は家庭というのを考えたときに、今までは家庭にはお母さんがいる時間がすごく多くて、父親がいる時間というのは意外と少なかったのではないかと思います。最近は結構父親も家庭にいるような感じがしていて、外で子育てしているご夫婦を見ると、子どもは父親の方に懐いている感じもしないではないので、そういうところを見るので、それはベースはお母さんだと思いますけれども、父親の育児参加、これすごく大事でいいことじゃないかなと思います。ぜひ父親教育をもっともっとやったらいいんじゃないかなと最近の様子を見てて思います。私らの世代は孫の世代もだんだん大きくなってくる世代になってきましたが、見てるとやっぱり両親ともずいぶん子育てに関わってきてるな、我々の時代

とは違うところかなと思いますので、是非、お父さんの育児参加を促すような運動がある
といいかなと思いました。

○鈴木

確かにですね、男性の育児休暇取得率が上がってしまっていて、結構若い人はとっています。
父親教育というのは大事で、行政での父親講座も最近なされていて、結構、父親の育児参
加も進んでいるように思います。

以前私のところにいた留学生の院生が父親教育を研究してしまっていて、日本の父親の育児
参加が低いということを国際学会で発表をしたところ、なぜ日本の男性は育児や家事に参
加しないのかと質問が集中したことがありました。父親だって参加したいのに、なかなか
参加しにくい理由の一つには労働時間や慣習の問題もありますが、価値観の問題もありま
す。

仕事か家庭かと問われたときに、仕事の方に価値観を持つような社会構造だというところ
に問題があると思っています。そうではなくて、ワークライフバランスと言いますか、
家庭も社会も、家庭も仕事もというように、両方が価値あるものなんだという発想を社会
全体が共有して、みんなが持つようになることが大事だと思います。

○銭谷

つまらない話ですけども、私はうちの奥さんと人生で一番楽しかったのはいつ頃かな
んて話をあるときしたことがあります。私がやっぱり長男が生まれて、親子3人で暮らした
若いあの時代が一番楽しかったと、言ったらですね、うちの奥さんは、「私はその時代が
一番大変だった」と言いました。ということはほとんど育児参加してないということなん
ですね。鈴木先生のお話を聞いて大いに反省して、もう追いつかないですけど、そういう
感じです。それとね、ものすごく自分自身の子育てで反省しているのが、うちの息子が3
人なんですけど、感情的に怒った時が何回かあったんですね。これは絶対にやめた方がいい
い。

大体感情的に叱るのは、こっちが忘れていても子供は覚えているんですよ。叱られた方
が、相当恨みに思っています。ずっといつも心にこもってますから、男は突然なんか噴火
するように感情的になることがあるので、それは避けたほうがいいかなと反省しています。
まあ、全然くだらない話ですけどね。

○角屋

さて、そろそろ閉じなきゃいけないような時間になりましたね。じゃあ、最後に質問をここで終わらせていただいて、先生方からご意見やお話があればお願いしたいと思います。

8. まとめ

○銭谷

最後は、鈴木先生にお願いするとして、私は、ペスタロッチーから学ぶことという、ペスタロッチーの考えというのは、現代に通ずるというところをおさえたいと思うんです。それは何かというと、第1は、「教育は何か」ということを根本的に考えた人だ、そして教育は結局人間教育だと結論した人だ。人間性を育てる、それが教育なんだということを行った人だ、つまり知識とか技術だけじゃないということですね。そして第2は教育の根本は何かということ考えた人だ。母親の愛だということ、つまり教育というのは愛だと、そういう温かい心の通り路がないと教育は決して実らない。教育の根本は愛だということ。第3は、教育はいわゆる教授してる時だけが教育じゃない。生活そのものが教育だ。だから生活をどういうふうに温かいもの、心のこもったもの、自覚的にものにしていくかというのは非常に大事です。どういう活動を日常でやるかというのを考えるのも大事だと。

この三つですかね。人間教育、教育は愛、生活が陶冶する。この三つのことを我々に現在にも通じる考え方を示してくれているというのが、これが一番だと思います。

それからもう一つ、大きな二つ目で言うと、やっぱり教育というのはいい先生を得ることが非常に大事だ。教師によって子どもが変わるということで、教育界に人を得ることが、あらゆる教育政策の基本になければならないということを確認させてくれる人だなと思いました。

最後、大きな3点でいうと、いろいろお話がありましたけど、ペスタロッチーの生き方に学ぶというのが面白いと思います。

冒頭申し上げたように失敗も多いわけですがけれども、新しいことにどんどんチャレンジする、そういうふうにも捉えることができます。

お茶の水女子大学の学長をやっておられた河野重男先生という方がいらっしゃいまして、この方は文部省の、今は中教審に統一されましたけれども、昔、教育課程審議会というの

があつて、そのリーダーだったわけですが、河野先生がよく言っていたのは、「困難に打ち勝って、なお疲れず」ということばです。「困難に打ち勝っても疲れちゃだめですよ、そこで終わりになっちゃうから。」困難に打ち勝って、なお疲れず、また次のことをやる。それが大事だということをよくおっしゃっておられました。

最後の最後ですが、「ALS苦しみの壁を超えて」(明石書店刊)という筑波大の名誉教授の谷川彰英先生のご本を紹介します。先生は最近ですと地名の本をたくさん書いています。

「水害にあいやすい地名」、「東京の地名の謎を解く」とか、そういう地名に関する本をたくさん書いていらっしゃる。2019年の5月に、ALS筋萎縮性側索硬化症、体が全く動かなくなる病気だそうですが、目玉しか動かないという、筋萎縮性側索硬化症という宣告をされました。それから5年間、生きていらっしゃるのですが、病気が宣告されたときは、よくて3年ぐらいだと言われたそうです。その方がALSになってから7冊か8冊目ぐらいの本を書いておられます。障がいを持っている人用のパソコンで一生懸命書かれているのですけれども、この本を読んでいましたら、この本の中にペスタロッチーの話が出てきています。

もともと谷川彰英先生は教育学の先生ですので、ご自身もペスタロッチーについては勉強し、ペスタロッチーは終生、孤児や貧しい子どもたちの教育にあたって、墓名碑に「全ては人のために、自分には何も求めず」と刻まれているけれども、やっぱり人生、この言葉に行き当たるなということを書いています。それで、この言葉はドイツ語で書いてあるわけですが、英語に訳すと、「All for others. Nothing for me.」これが英訳になるわけですが、谷川先生は一生懸命、「すべては自分のためにではなく、人のために」という訳を考えました。

すべては自分のためにではなく、人のために。この訳が自分は気に入っているの、この訳にたどり着いて、これから自分の体は動かないわけで、自分のためにという生き方はできないので、全部、人のために生きるという決意でこれからも生きていきたいということ、このペスタロッチーの教えを心に刻んで自分は生きていくことを書いておられました。この本の副題は、「利他の心で生かされ、生かす。」ですので、ご紹介させていただきました。

○角屋

ちなみに谷川先生は、京都の風土誌も書いておられます。京都の地下のところに書店が

ありますでしょ。あの書店には、谷川先生の本が結構多いんですよ。ぜひご覧ください。

○鈴木

銭谷先生、ありがとうございました。ほとんどまとめてくださったので、何も言うことはないように思いました。谷川先生がそういうことを書いていらっしゃるのと初めて知りましたので、ペスタロッチーの影響といいますか、教育を志した人はどこか心に残っている理論なんだと思いました。

私の方からはいくつかお話いたします。私はペスタロッチーを知って、絶対的平等感に惹かれて、今まで研究をしてきました。私は、教育とは、自分の弱さとか足りなさ、できなさを自分で知り、だけどもそこに留まれない理想とか希望があり、それに向かって努力したいという子どもに手を差し伸べる技術だと思っています。よく私は学校で説明するとき、根っこという言葉を使って説明しています。私たちにはかけがえのない良さというものがあり、どんな子どもも天与の、神様から与えられたかけがえのない自分らしさというものを持っていること、それを見出し、育てるのが先生の役割だということをお話ししています。先生方が子ども一人ひとりにはかけがえのない良さがあることを認めて、愛情深く育てる中で、子どもは根っこを大きく深く張っていきます。太い根が張れば張るほど子どもは強く大きく育ちます。社会に出ればいろんなことがありますけど、強い風に吹かれても根がしっかり張っていれば、何とか持ちこたえることができるのです。根っこというのは子どもが本来持っているかけがえのなさであり、それがあると信じるのが大切です。表面においてはみんながいつもいい子であるわけではなく、弱さもありますし、失敗することもあるわけですが、それでもなお子どもの良さ、良くなりたいという思い、良くなろうとする意思を信じ、愛情をかける先生あるいは大人がいて、子どもたちは伸びていく、そういう根っこを育てていくのが教育だとお話ししています。それがペスタロッチーから学んだものだと思います。

それともう一点、失敗から回復するというところですね。今、レジリエンスという言葉で言われていることにつながるように思います。私たちはいつもうまくいくわけではなく、失敗もあり、うまくいかないこともあり、またうまくいくこともある。そういう時に信念を持ってやり遂げていく。それをペスタロッチーが教えてくれているように思います。

前原寿先生のご縁で先生と知り合いになられたということで、一つだけエピソードをお話ししますと、記録映画を作りに行ったのは私が東北大学の助手の時です。記録映画の題

名は、「ペスタロッチーの生涯と思想—いのち果てるとも—」です。「いのち果てるとも」という言葉は、ペスタロッチーの著作の中の一節です。今、自分たちは教育を子ども中心に変えようとしている。子どもの知識、技術、心を調和的に育てようと考えている。だけどこれを理解してくれる人は少ない。少ないけれどもこれが正しければ、私の命が果てようとも、必ず燃え上がっていく。世の中に広がっていくであろうということを述べている一節をとって、題名にされました。

ちょうど記録映画製作のためにスイスに行くその時に、前原先生は病気の疑いがもたれていて、主治医からスイスに行かないようにと言われたそうです。家族も止めたそうです。だけど先生はどうしても行かせてくれと言われて、スイスに行かれました。私たち、同行したメンバーにはこそこのことは伏されていました。記録映画が完成した数年後に先生は若くして亡くなりました。その時に私は、「いのち果てるとも」という題名は、前原先生から私たちへのメッセージだったのではないかと思ったんです。私の命が果てようともペスタロッチーの考え方を広めてほしい、ペスタロッチーのこの人間愛に満ちた教育を広めてほしい、そのことを通して人類の幸せを実現してほしいという、先生からのメッセージだと私は受け止めました。私は、前原先生がお亡くなりになった年齢を越えてきて、ペスタロッチーの教育を広めていかなければと強く思うようになってきていまして、致知出版に書かせていただく機会をいただいたことに感謝しています。またそれをきっかけとして、こういう場をお借りして、ペスタロッチーの生涯や教育思想についてお話することができたことに感謝いたします。教育を良くしていく、子どもたちの幸せ、人類の幸せというものを考えていくことが 私に課せられた使命だと思っています。

ペスタロッチーの生涯や教育思想をご紹介する機会をいただきましたが、これで終わらず、良い教育を広めていっていただく一つのきっかけにさせていただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

○角屋

あとは言葉がないくらいに先生方に締めていただきました。今日は本当にありがとうございました。これから我々もまた新たな教育にしていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。本日は、どうもありがとうございました。

○新免

先生方、本当にありがとうございました。私どもの公益財団の初代理事長、そして全家研の初代総裁の平澤興先生、京都大学の第16代総長であられましたが、福沢諭吉先生のことを尊敬されていて、福沢諭吉先生は「一家は習慣の学校なり、父母は習慣の教師なり」と、その頃から父母と語られています。平澤先生はお母さんということで、「母よ、尊い母よ」と、お母さんをターゲットにして家庭教育の支援ができないかということで、全日本家庭教育研究会という運動を立ち上げられました。

その全家研五訓に、「親はまず暮らしを誠実に、子どもには楽しい勉強を、勉強は良い習慣づくり、習慣づくりは人づくり、人づくりは人生づくり」があり、その最初に「親はまず暮らしを誠実に」という言葉を残されているんです。お母さんもしっかりしてほしい。また、今日出ましたお父さんもしっかりしてほしい。そのようなメッセージもこれから全家研の運動として家庭教育確立運動を推進するためにも、メッセージとして打ち出さなければならないと思いました。

その意味では、本日の対談の成果は非常に価値があるものだと私は思っておりますので、全家研としても、しっかりと受け止めてこれから生かしていきたいと思えます。そしてまた学校の先生方にも今日の話はお伝えしたいと思えます。本日は長時間にわたり貴重なご示唆を賜り、ありがとうございました。